

# 「ミスト」

—2 稿—

2025/7/25

雨森 れに

〈人物表〉

須藤 清貴

(42)

肉屋の主人

須藤 葵

(39)

清貴の嫁

川鍋 ゆきえ

(69)

革公房を営む未亡人

外国人

(40)

ヴィーガン主義の移住者

※『ミスト』ステイヴン・キング著からタイトルをお借りしました。

1. 山（昼）

那須岳のような活火山。山頂部は岩石地帯になっているが、それ以外は鬱蒼としている。

ガスのせいで全体的に霧がかつたように見える。

2. 商店街（昼）

山間部にある町の商店街。温泉地であり、道端に温泉の蛇口がある。側溝からは湯気があがっている。ご機嫌な外国人が歩いている。手にはエコバッグ。

3. 肉屋・外観（昼）

商店街の一番端。周囲の店や家はすべて廃墟。肉屋も古い、というよりボロボロ。オーニングはどころどころ破れ、ひらひらとしている。店の横には須藤宅があり、車庫が解放されている。そこには高級バイクが並んでいる。

4. 肉屋・店内（昼）

川鍋ゆきえ（69）が店に入る。ドアベルの音。ショーケースに様々な肉が並んでいる。どれも山盛り置いてあるのに、「自然ハム」だけは残り僅か。100グラム500円。大きく「ヴィーガン対応」と書かれている。

川鍋 「ちよっと葵さん。これしかないの？」

店の奥でテレビを見ていた須藤葵（39）。

川鍋に気づいて、慌ててショーケースの後ろに立つ。

葵 「ごめんねえ。ほら、あの外国人が来て……」

川鍋 「ああ。あの人どこ行っても『ヴィーガン』じゃなきゃ食べないんですよ」

葵 「野菜しか食べてこなかったからハマってんのよ」  
葵が、残っているハムをすべて電子秤に乗せる。

分厚いハムがぬらりと光っている。

葵 「200しかないけど、どうする？」

川鍋 「仕方ないでしょ。で、次の入荷はいつなの？ あのカイ

ジンより早く来なきゃ」

葵、店の奥にある厨房に向かつて、

葵 「アンタァ！ 次のハムは？」

厨房では、須藤清貴（42）が色の悪い豚肉にネットをつけている。

清貴 「（吐き捨てるように）3日後だよ」

葵は清貴の態度に怒りそうになるが、耐える。

葵 「3日後だって」

川鍋 「もっと早くなんない？ 明日、息子夫婦が来るの」

葵 「いやあ、うちもいろいろ段取りがあるんだよねえ」

川鍋 「そう？ これはひとり言なんだけど、このハムっていつも味が違って何のお肉なのかなって考えるんだよね」

葵 「……やっだあ。仮にもヴィーガン対応なのに？ お肉？ ありえないんだけど」

川鍋は葵の焦りを察し、にやりと笑う。

川鍋 「物は言いようってわかってるんだよ。うちは代々革やってるでしょ。前は肉もよく食べてたんだから」

川鍋はショーケースを指で叩く。

川鍋 「でも、信じて買ってる奴らはどう考えるだろうね。特にあのガイジンなんかはブチギレるんじゃない？」

葵は怯えた目で川鍋を見る。

川鍋 「これもひとり言なんだけどね。明日用意してくれるなら、借金の返済、ちょっと待ってあげてもいいなあって」

葵の喉が上下する。

## 5. 肉屋・厨房（昼）

壁にバイクの切り抜きや写真が貼られている。

厨房の中央には挽肉用の機械と作業テーブル。

清貴が色の悪い角切り肉で挽肉を作っている。

葵が厨房に来る。

葵 「今から行ってきて」

清貴 「どこに」

葵 「山。明日、絶対にハムを用意しなきゃなの」

清貴 「お前、何言ってるのかわかってんの？ 俺、死ぬよ？」

葵 「とにかく少しでいいから。行ってきたよ」

清貴 「(小声で) 1日や2日のことでうつせえな」

葵がテーブルを叩く。

葵 「川鍋さんが、返済待ってくれるって言ってるの!」

清貴 「は? なんでそんなところに金借りたんだよ……」

葵が清貴を睨む。

清貴が舌打ちし、その場を離れる。

山の麓。誰も来ないような荒れた場所。

古いバリケードがある。

バリケード前にトラックが停まる。

× × ×

清貴が山道を歩く。

登山リュックとクローラーボックスを持っている。

近くの木の子にはリスがおり、清貴を見ている。

清貴が立ち止まる。

先には岩石地帯。ガスで霧がかっている。

近くの木に捕まり、岩石地帯の様子を伺う。

リスが木から降りて、岩石地帯へ走っていく。

清貴は、岩の隙間に小鹿が倒れているのを見つける。

気合を入れ、防毒マスクとゴーグルを装着。

ガスに注意しながら、そろりそろりと歩き出す。

10メートルほど離れた場所からガスが噴き出す。

噴き出したガスに乗って、リスの死骸が落ちてくる。

清貴は悲鳴をあげながら、走る。

転がるようにして鹿の所に到着。鹿は息絶えている。

2メートルほど先からガスが噴き出す。

清貴、鹿を抱いて走り出す。必死の形相である。

× × ×

鬱蒼とした山の中。

ぜえぜえという息遣い。

清貴は仰向けに寝転んでいる。

隣の鹿を見る。

安心したように、大きく息を吐く。

胸もとから写真を取り出す。車庫に並ぶ高級バイクが写っている。

清貴は写真にキスする。

## 7. 肉屋・厨房（夜）

テーブルの上にはバット。小鹿が乗せられている。

葵は目だけを動かし、隣にいる清貴を見る。

清貴はどこか誇らしそうな笑顔。手にはバイク雑誌。

葵 「ねえ、これだけ？」

清貴 「小鹿だからな」

葵 「こんなハムにしてたって……」

清貴 「（カチンときた様子で）じゃあお前が行けよ！」

葵がテーブルを叩く。

清貴も負けじとテーブルを叩く。

葵が更に威嚇するようにテーブルを叩く。

葵と清貴は交互にテーブルを叩き続ける。

バットが徐々に動き、小鹿が落ちる。

清貴と葵が我に返る。

ふたりは椅子に座り、うなだれる。

清貴 「なんで川鍋さんに借りたんだよ」

葵 「困ってるなら利子なくていいって」

清貴 「は？ 金ならあるだろ。ハムがあれだけ売れて——」

葵 「それ以外がまったくでしょ」

葵が厨房の隅を見る。ゴミ箱に入りきらないゴミ袋がいくつも置いてある。

葵 「惣菜なら多少売れるけど、仕入れた分はほとんど捨ててるじゃない」

清貴 「だって……ハムに原価かからないのか？」

葵は鼻で笑う。

清貴 「嘘だろ。また新しいの買いたいのと思ってたのに」

清貴は、テーブルに置かれたバイク雑誌を開く。  
ページをめくりながら、

清貴 「これか、これか……これにしようかって……」

葵 「むしろバイクを売らないと生活できなくなるけど?」

清貴が悔しそうに雑誌を握りしめる。

外から銃声音。

ふたりは外へ。

## 8. 肉屋・店前（夜）

湯気が立ち上る中、川鍋が呆然としている。手には狩猟用ライフル銃。

川鍋の目の前には外国人が倒れている。胸から血を流し、動かない。

川鍋 「葵さん……私、ちよつと脅かそうと……」

葵と清貴、目を合わせ、頷く。

清貴は厨房へ走る。

葵 「これ、運ぶよ!」

葵が外国人を無理やり抱き上げ、店内へ運ぶ。

そのあとを追う川鍋。

入れ替わるように清貴が外に出る。

小鹿を地面に置く。

ようやく近辺に住む住人が集まり始める。

住人 「なんか銃声しなかった?」

清貴 「ああ、川鍋さんが悪さしてた鹿やつてくれたんすよ」

清貴が小鹿を指さす。

住人 「へえ。腕、鈍ってないんだねえ」

## 9. 肉屋・厨房（夜）

川鍋が椅子に座っている。肩が小さく震えている。

葵は川鍋の肩を優しく撫で、話しかける。

川鍋は、何度も頷く。

床に寝かされた外国人の指先がピクリと動く。

## 10. 肉屋・店内（朝）

鼻歌を歌う清貴。

ショーケースに大量の「自然ハム」を並べる。

おわり